

チェルノブイリに思いをよせて

# ポレーシエ

「東電隠ぺい!」「国も知っていた!」  
…原発ひび割れ事故発覚!!

東電による「原発事故隠し」が発覚して  
から1ヵ月、その実態が次々と明らかにな  
ってきた。(詳細は次ページ参照)

①事故を報告しない。②無届でこっそり  
修理する。③点検記録を改ざんする。④  
新品に交換し証拠隠滅を図る。……と、  
きわめて悪質である。

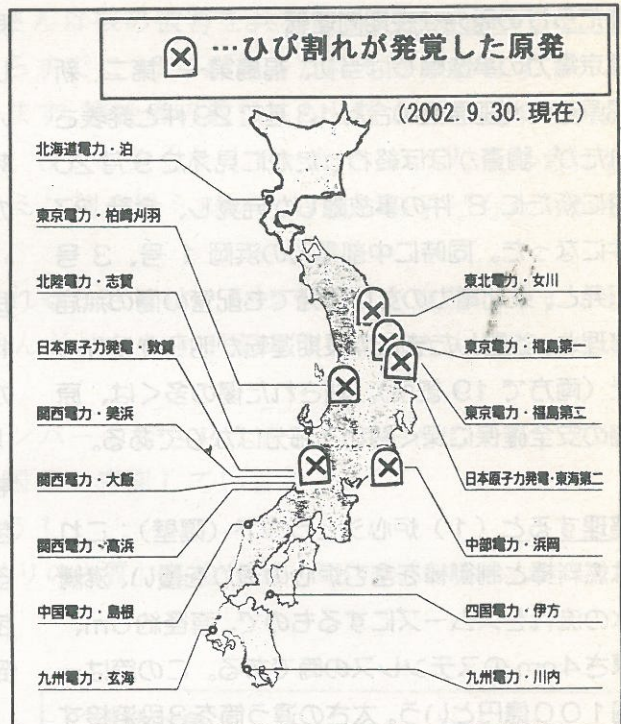
しかも、この事故隠しは、『異常ありの  
報告書なんかいらない!』…と隠ぺいを  
指示した国(通産省)と、『ただでさえ原発  
はトラブルが多い。まあいいや、異常なし  
だ!』…と危機管理能力ゼロの電力会社  
による、2人3脚で進められた。そしてこ  
の体質は今も続いている。

たとえば、昨年1月の省庁再編で生まれた経済産業省の諮問機関  
「原子力安全・保安部会」の委員には、東電の副社長達が名前をつらねているのである。

作ってしまった原発に対する経営責任をのがれるため、「原発からの撤退」が口に出せない  
のであれば、…せめて事故を起こさぬよう、安全運転だけはしっかり実行してもらいたい。

脱原発は、私達が必ず実現させますから…。

(J)



〒466-0822 名古屋市昭和区楽園町 137 1-10

チェルノブイリ救援・中部 代表：大谷早苗

郵便振替：00880-7-108610

TEL/FAX：052-836-1073 (月・水・金 10:00~17:00)

E-mail：chachubu@muc.biglobe.ne.jp

ホームページ：http://www.chernobyl-chubu-jp.org (アドレスが変わりました)



8月末から始まった東京電力の原発事故隠し発覚事件は、底なし沼のように深く暗く、中部電力と東北電力など他の電力会社にまで広がり、事故隠しが日本の電力会社の体質に深く関わるものであることをさらけ出した。政府と電力会社、原子力産業からなる原子力社会の腐敗と怠惰、安全意識の麻痺は、老朽化原発の危険性をさらに高める。チェルノブイリの再来を招かないうちに一刻も早く原発時代を終わらせよう。

### 傷だらけの原発を長期間運転

東京電力の事故隠しは当初、福島第一、第二、新潟県柏崎刈羽原発の合計13基で29件と発表されたが、調査がほぼ終わったかに見えた9月20日に新たに8件の事故隠しが発覚し、合計37件になった。同時に中部電力の浜岡1号、3号原発と、東北電力の女川原発でも配管の傷の無届修理と、放置したままの長期運転が明らかになった(両方で19箇所)。隠された傷の多くは、原発の安全確保に深く関わる部分ばかりである。

**整理すると**(1) 炉心シュラウド(隔壁):これは燃料棒と制御棒を含む炉心の周りを覆い、沸騰水の流れをスムーズにするもので、直径約6m、厚さ4cmのステンレスの筒である。この筒は一個100億円という。太さの違う筒を3段溶接するため、溶接部の劣化によるひび割れが、ほぼ全周に伸びていた。(2) 蒸気乾燥機:沸騰した蒸気から水滴を除き、タービンに流すための装置で、压力容器の上部にあり、多数の小部屋からなる。

(3) 再循環ポンプ配管:压力容器内の沸騰水を高速で循環させ、蒸気の泡を追出し、核分裂の速度を調節するポンプの配管。浜岡1、3号と女川1号で見つかったら、東京電力でも3原発8件の傷隠しが新たに露見した。(4) 制御棒駆動機構の水圧配管:通常時は核分裂を制御し、事故時には緊急停止に使う装置の配管。(5) 中性子

測定器案内管:炉心の核分裂の度合いをモニターし、制御のための情報を収集する測定器が入っている配管。どれをとっても、少しぐらいなら傷があってもかまわない、という機器ではない。問題のほとんどは劣化によるひび割れである。

### 我々と常識が違う原子力村社会

150気圧もの水圧がかかるステンレス配管の傷の深さが5mm、長さが10cm以上あっても、「傷ではなく傷の兆候」という電力会社の(非)常識が事故隠しの原因である。政府は今度の騒ぎを機会に、この程度の傷はそのままに運転を認める「維持基準」策定をめざすという。厳しい基準を守るのではなく、現実に基準をあわせる本末転倒、これも規制緩和の一環だろうか。

### アメリカの内部告発がなかったら

今度の事故隠し発覚は2年前のアメリカのGE社の下請け企業社員の内部告発が発端である。国はそれを2年も放置し、GE本社からの催促でやっと重い腰をあげた。電力会社と国は同罪である。内部告発がなかったら、傷だらけの原発の運転が今でも継続していたはずである。そうした状態で東海地震があつたら、と思うとぞっとする。地震の力は「応力集中」によって、傷を一挙に広げ、配管破断と炉心溶融の地獄図がもたらされるはずである。(河田)



## 親愛なる日本の友人の皆さん!

今日、私たちは皆さんとともに、また新たに1945年8月のあの日々、日本の平和な都市広島と長崎が残酷な爆撃にさらされたあの悲劇の日々を思い起こします。

原爆の爆発によって何十万人もの人々が亡くなりました。彼らの霊の前に頭を垂れ、私たちは皆さんと追悼の気持ちをともし、人類に対する戦争の悪業と闘うことを誓います。

運命のめぐり合わせで、私たちと皆さんは核の被害を共有する兄弟となりました。そして、チェルノブイリ原発の事故からすでに16年経ったにもかかわらず、チェルノブイリは人の命を奪いつづけています。犠牲者の数は、もし皆さんの長年にわたる援助と心からの支援がなかったなら、もっと多くなっていたでしょう。私たちは皆さんからの医薬品や医療機器、ビタミン剤や粉ミルク、皆さんの子どもたちからのクリスマスカードに感謝しています。

友人たちが悲しみを分かち合ってくれるときには、いつもそれを克服しやすくなるものです。私たちは、これからも皆さんが私たちを不幸のうちに置き去りにしないでくださることを願っています。

「チェルノブイリ救援・中部」のメンバーの皆さん、皆さんの子どもたち、日本の外務省と郵政事業庁、すべての日本国民に感謝しています。

皆さんに神のお力添えがありますよう!

2002年8月6日

「チェルノブイリの人質」基金代表 V. キリチャンスキー



## 2002年度外務省交付金決定!

交付額 3,042,000 円

(申請額: 4,680,000 円)

1996年から申請し続けてはや7年。今年は決定通知が例年より遅く、やきもきしていました。昨年よりは約40万円減額されましたが、なんとか活動を維持できる金額となりました。

今年度から「外部監査制度」が導入され、すべての申請事業に義務付けられました。(内部のズサンだった体制を素直に反省し、外部に厳しい体制を作るためなのでしょうね…。) (市原)

### <補助対象>

(ナロジチ地区病院・作業者協会・障害者協会)

A. 医療診察事業	
薬剤費	1,820,000 円
医療機材費	260,000 円
外部監査費	267,000 円
B. 専門家派遣事業	
専門家派遣費	325,000 円
現地調整員費 (通訳代)	27,000 円
医師等人件費	18,000 円
C. 援助物資輸送費	325,000 円
合計	3,042,000 円





チェルノブイリの子ども達に

# クリスマスプレゼントを贈ろう

チェルノブイリの原発事故から16年。

今なお子ども達は様々な病気に苦しみ、不安な日々を過ごしています。

チェルノブイリの子ども達の健やかな成長を願い、

あなたからの心温まるクリスマスプレゼントを贈ってください。

## ☆ 粉ミルクを贈ろう

汚染地域が40%にも及ぶジトーミル州の小児病院には、先天性異常・甲状腺癌や白血病など、重い病気を患った子ども達が入院しています。事故によって引き起こされた現状はなおも深刻です。

今年も「ミルクキャンペーン」を展開します。

放射能で汚染されていないミルクを、

チェルノブイリの赤ちゃんに届けます。

是非ご協力ください。

## ☆ クリスマスカードを贈ろう

遠く離れた日本からの励ましの言葉は、子ども達を勇気づけます。

心のこもったカードを贈ってください。

1) 絵やメッセージをカードに書いてください。日本語でも構いません。

2) そのカードを封筒に入れ、封をしないまま、さらにひとまわり大きい封筒に入れて、下記まで送ってください。

事務局でロシア語のメッセージと折鶴などを同封して、まとめてウクライナに送ります。そして、現地の救援団体「移住基金」が、小児病院や孤児院の子ども達に届けます。

宛先 〒466-0822

名古屋市昭和区楽園町137

楽園アパート1-10

チェルノブイリ救援・中部

～12月16日(月)必着!!～

送金は、郵便振替でお願い致します。

〈郵便振替〉00880-7-108610

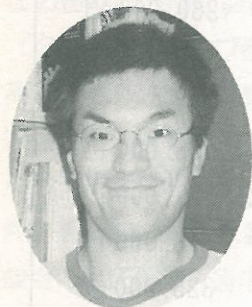
加入者名 チェルノブイリ救援・中部

私達、チェルQスタッフと一緒に

「クリスマスカード作り」をしませんか!!

サークルやミーティング、バザーなど、

お気軽にお呼びください!!



〈お問い合わせ先〉 チェルノブイリ救援・中部 事務局

TEL/FAX 052-836-1073 (月・水・金 10時～17時)



## みなさん、こんにちは。ドーフリイ・テーニ!



8月25日に「旅行者には見えないウクライナの街」というテーマでお話させていただいたシガル・オレーナです。私は2000年7月に「語学指導等を行う外国人青年招致事業(The Japan Exchange and Teaching Programme)」の参加者として来日し、今までの2年間、京都府国際センターで国際交流員として勤務しています。当センターではウクライナ語講座、ウクライナ料理教室等の講師をつとめており、小学校や青少年活動センター等を訪問し、ウクライ

ナを紹介するほか、京都市・キエフ市に関係する翻訳や通訳、センターのイベントのお手伝い、月刊情報誌の編集などを担当しています。

国際交流員という仕事のおかげで、日本の企業・大学・福祉施設等を見学し、多くの人々と交流することにより、日本の文化や習慣等を学んでいます。

「チェルノブイリ救援・中部」の活動は、キエフ国立言語大学時代に知り合った竹内さんと、名古屋大学で留学していた同大学のペトリチェンコ・イリーナさんから聞いており、「ポレーシェ」を読ませて頂きましたが、この度、初めてみなさんにお会いしました。ウクライナへの知識や理解が深く、家族のような心の温かい「チェルQ」の皆様と一緒にとても楽しい時間を過ごさせて頂き、ウクライナが好きな人々に出会えて大変嬉しく思っています。母国ウクライナへのご支援やご協力に心から感謝しています。日本とウクライナとの関係がもっと活発で親密なものになるよう、これからも一生懸命頑張りたいと思っています。「チェルノブイリ救援・中部」の皆様のなにかお力になればと思っていますので、今後ともよろしくお願い致します。皆様のご活躍やご成功を祈っています。また再会するのを楽しみにしています。

ド ポバーチェンニャ!(また会いましょう!) 心をこめて、シガル・オレーナ

### 第5回ウクライナ講座のお知らせ

2002年9月視察団報告会(「第2次栄養調査報告」&「現地の最新情報」)

日時: 10月19日(土)午後1時30分~4時

場所: 愛知県勤労会館第1講習室(地下鉄・JR鶴舞駅より徒歩5分)

参加費: 無料

今回の視察団報告会は、二人の看護師(林照美さん・神野美知江さん)による、第2次栄養調査「新生児の異常の原因を母子の健康管理・栄養学的見地から探る」がメインテーマです。現地の最新情報も楽しみですね!



# ウクライナ訪問報告

神野美知江

2002年9月12日から22日(ウクライナ滞在は7日間)まで出掛けてきました。

13日に、キエフの「在ウクライナ日本大使館」を訪問し、人道支援である外務省の「草の根」支援に対しても税金(20%)がかけられる可能性があることについて、ウクライナ国との折衝をお願いしました。

ジトームルへ移動した翌16日には、私たちの奨学金を受けて、准医師の資格を取ったオクサーナ・イヴァンチェンコさんが働く、「ナロジチ地区ノリンツィ村(汚染地の村)」の診療所を訪ねました。また、「ナロジチ地区行政・保健所」を訪問し、同地区で収穫した食物の放射能を実際に測定するところを見学しました。汚染食品と分かったときには、持ってきた人に指導を行い、地下に埋めることになっている。…しかし大切な食材からは、臭いも味もしないので隠れ食べていることは否めないとのことでした。

17日には、今年度、新しく支援対象となった「ヴァシリエフカ村診療所(移住者の村)」に行き、どのような支援が必要であるかの視察をしました。

18日には、今年度で支援を終了する「ゼレムリヤ村診療所」へも、今までの支援物資の確認のために訪問しました。

「州立小児病院」では、①出生率が低下しても未熟児は増加しているためNICUの増床を検討していること、②保健局の決定で小児血液腫瘍セクションがセンターとして独立すること、③その治療に必要な精密機器の必要性、④単価の高い抗がん剤購入費と、⑤その治療効果を高めるための無菌室増床費など、さまざまな問題について話し合いました。

嬉しいことに、滞在中に6月に送り出した船便の税関手続きが完了し、荷物が全て無税で通関したことを確認できました。初めて「市立小児病院」を受け取り先にしたので、書類のやり取りなどに双方が気をもんだ荷物でした。

「障害者協会」は、最近までタビノヴァ代表の自宅が事務所代わりだったのを、友人の好意により、無料で部屋を借りることができました。医薬品購入費の他には、資金のあてがないので10㎡という小部屋には、電気も暖房も電話もないとのことでした。

「ジトームル保健局」では、州立小児病院に血液腫瘍センターを開設し、ジトームル市内で血液腫瘍の子どもを治療することにより、患者の家族を経済的にも助けたいが、やはり資金不足が悩みの種とのことでした。「ホステージ基金」では、税金問題との駆け引きが

一番の問題で、ウクライナ国内で金銭の取引が行われると、取得税(20%)がかけられる。毎回、人道支援委員会に申請して、「この取引については無税扱い」という法律を制定することで、税金を免れているとのことでした。「大切な支援金を税金に取られてはならない」と苦勞していることが分かりました。

「州立成人病院」には腕利きの心臓内科の医師が、入院中のアントニウクさんの治療にあたっていました。リハビリが始まったところを見ると、順調に回復しているようでした。



〈元奨学生のオクサーナ准医師〉



〈無事、通関手続きが終了した船便〉



## <ウクライナ探検記>

林 照美

空から見るウクライナの大地は、雲が重くかかっていた。

「この広大な大地に、今も放射能に汚染された区域がある。しかも人間が汚染したのだ！」という思いで胸が締めつけられるような感覚を覚えているうちに、キエフの空港に降り立ちました。

出迎えてくれた竹内さんの笑顔に、ホッと胸を撫で下ろしホテルへ移動。いよいよ明日からはジトーミル…何を見て何を聞いてくれば良いのかという思いに頭を悩ませていたのに、気がついたら朝になっていました。

消防署の4駆の迎えで、宿泊先の州立小児病院へ向かいました。現地についてはしばらくは、何度もウクライナを訪問して手際のよい神野さんの真似をしながら、徐々に環境に慣れていきました。ジトーミルについた翌日は、今も放射能汚染が340ラドもある汚染地のクリシ村に戻って一人で住んでいる（牛4頭、犬3匹、猫7匹も一緒でしたが…）74歳の老婦人に会いました。チェルノブイリ事故後、彼女の家族は放射能の影響で重い病気を発症し都会に移住したために、離散してしまったそうです。それまでの生活の中ではいろんな夢や希望もあったでしょうに…。

過去に被曝の経験を持つ日本は、もっと彼女らに対してできることがあるのではないか、と考えさせられました。その日の夕方、実際に事故処理にあたった人々にも会いました。事故処理の際に被曝し、「重い病気になってもなお、まだ何か他の人のためにやれることがあるはず。」と頑張っている彼らを目の当たりにし、思わず涙が出て胸がいっぱいになってしまいました。反対に、「涙を見せてはいけないヨ。あなたには明るい明日があるのだから。私達も希望を持っています。中部の皆さんのおかげでここまでやってこられたんです。」と笑顔で話される顔を見て、また胸キュンの私でした。これだけの信頼関係を築いてこられた「救援・中部」の方々の、これまでの努力と向上心と勇気におのずと頭を下げずにはられませんでした。

宿泊先の州立小児病院の見学も、私にとってはショックなことでした。保育器は日本から支援された9台だけ。1986年の事故以来、発育異常・白血病・腫瘍といった疾患が増えていると聞き、抗がん剤の十分な供給が望まれています。病院の方でも、血液腫瘍センターの設立に向けて動いていますが、問題は山積しているとの事でした。

「現在のウクライナには、物はたくさんあるのにお金がない。」と聞きました。人間としてこれから何をなすべきか？それは、これからの時代を作り上げていく子ども達を育てていくことが大切であると思います。そういった意味で、州立小児病院の支援をしていることは本当に大切なことなのでしょう。ジトーミルの人々の笑顔や、やさしさ・たくましさは、すばらしく輝いていました。

今回のウクライナ訪問は、本当にいろんな事を私に学ばせてくれました。また、いずれかの機会に、支援という形で恩返しが出来たらと思います。





## チェルノブイリ救援 市民グループ情報交換会

カタログハウスで年に一度開かれる、日本各地のチェルノブイリ救援市民グループによる情報交換会に、救援・中部からも2名が参加しました。互いに活動報告やこれからの課題などについて意見を交わしました。

情報交換会で私たちは、昨年、残念ながら実現できなかった、ジャーナリストで「チェルノブイリの祈り」の作者、スベトラナ・アレクシエービッチさんを招いての講演会の開催を改めて提案しました。これには、各地の団体からも再度熱い賛同が得られ、各地と協力して来年度の実現に向けて動き出します。 (京)



特別ゲスト ワレリー・クラスノフ教授(ロシア保健省附属モスクワ精神学研究所長)のお話

### 「リクビダートル(事故処理業者)の精神・身体に与えた

### チェルノブイリの影響」—国際精神病学会を終えて—

チェルノブイリ原発事故による人体への影響は、身体だけでなく、心にも多大な悪影響をもたらしている。教授らの研究グループは被曝者たちの間に精神疾患が多く見られることに着目し、被曝者専門の精神科部門を開設した。また教授らは、被曝者を ①リクビダートル ②移住者 ③汚染地域に現在も居住している人々 ④母体内で胎児被曝をした子ども達 ⑤リクビダートルの親から生まれた子ども達 の5群に分けその精神状態について調査した。

その結果、②の群では新環境に慣れるという精神的負荷により、抑うつや神経症様の症状が見られた。③では、土壌汚染により生活の糧としていた生産物(農業・牧畜)が食べられないというストレスにより、行動異常(集中力低下など)が見られ、④においては、知能や身体の発育不全が出現した。そして⑤では、特に両親がともに被曝している場合、傷ついた遺伝子による精神的・身体的な障害(心臓血管系・循環器系・消化器系)が著明であった。

これらと比較しても、①リクビダートルへの影響は甚大であり、その症状は精神・身体をとわず多岐にわたっている。特に精神的な問題は、被曝による身体的なダメージが直接行動異常を起こさせる場合、また遺伝子欠損などから内部疾患が発症し、その疾患の影響で二次的に心が病む場合など、②～⑤よりも直接的かつ重度なものであることが多い。

このように、放射能被曝者を取り巻く精神的環境は複雑であるといえる。

当日司会をされた世界核被災者医療交流会の佐藤幸雄氏は、「広島でも被曝者の心理問題はアキレス腱であった」と述べている。当時の日本は、この研究所のように連携をとって総合的に治療を行うシステムがなかった。日本の被曝者は「心の被曝」を理解してもらえず、なんの精神的サポートも得られなかったという。

精神の安定は免疫系の機能を正常にし、身体の自己免疫力と治癒力を高める。被曝者たちの健康状態を向上させる意味でも、心のケアは有効である。

今後とも、精神的な支えとなる支援を探り、継続していく必要がある。

(美)



## 「私は、チェル救の会員なのかしら?」「会費は払わなくても大丈夫?」

本会の会員・会費制度について、質問を受けることがありますので、ここで簡単に説明しておきます。本会の会員・会費制度は、本会の歴史を反映して、少し複雑です。

1990年に任意団体「チェルノブイリ救援・中部(以下、チェル救)」が結成されました。1986年に起きたチェルノブイリ原発事故の深刻な被害・被災の状況が、この前年からようやく世界に知られるようになり、世界的にチェルノブイリ救援の機運が盛り上がっていました。

チェル救が結成された当時、組織面では、代表者が決められ、寄付を受け入れる郵便振替口座が開設されていただけです。規約はなく、スタッフが決まっていたわけでもなく、事務所もありませんでした。当然のことながら、会員や会費の制度もありませんでした。救援活動を目的とする市民団体の初期は、どこでもそんなもので、チェル救だけが特別ではありません。

会員・会費制度はありませんでしたが、寄付をくださった個人・団体(以下、サポーター)には、隔月刊の通信誌『ポレーシェ』が送られ、それによりサポーターはチェル救の活動内容を知ることができました。また、会の運営はすべてのサポーターに開かれていました。

事務所を開設し、専従有給職員を置いた92年に、「維持会員(会費1,000円/月、または10,000円/年)」を募ることになりました。「一般寄付金は、現地事業費に回すべきである」という意見が強く、それとは別に運営費(管理費)をまかなう資金を確保する必要があったからです。維持会員は一切の権利・義務を伴わず、「定期的に運営費を寄付してくれるサポーター」という位置づけでした。97年までは、『ポレーシェ』で維持会員の募集をしています。

特定非営利活動法人の制度ができ、チェル救も法人化することになった98年から99年にかけて、会員・会費制度について本格的な議論がありました。特定非営利活動法人は、社員(正会員)が運営することになっているので、正規の会員制度を作らざるをえなくなったのです。種々議論の結果、『ポレーシェ』を送付しているサポーターに対して正会員入会の呼びかけをし、正会員になることを希望されたサポーターに正会員になっていただくことにしました。その際、正会員についても会費は取らないこととしました。そのほうが正会員になってもらいやすいし、会費を取ることにした場合、万一会費滞納のような事態が発生するとやっかいなことになる、というのがその理由です。正会員になることを希望しなかったサポーターに対しても、これまでどおり『ポレーシェ』の送付を続けています。

このように、「正会員もサポーターも会費はなしで、そのかわり自由に寄付をしていただく」というのがチェル救の資金調達方法です。寄付については、たとえば「ポレーシェ郵送料」といった用途指定をすることも可能です。この方式はこれからも維持していくつもりです。

ただし、「会費名目のほうが寄付をしやすい」という声があることも事実です。そこで、最近では休眠状態にあった「維持会員制度」を再活性化させることにしました。その際、維持会員費の用途については、運営費に限定しないことに変更させていただきたいと思えます。

(維持会員の皆様に対する会費の請求方法などについては、決定し次第、お知らせします)

田中良明

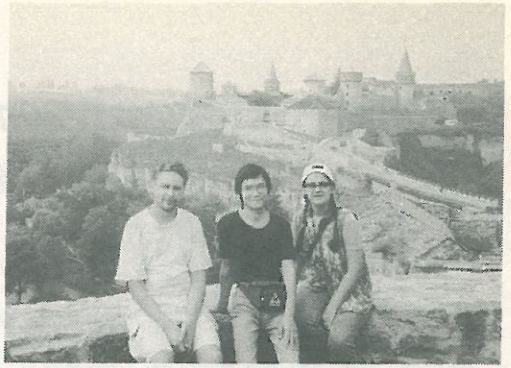


## 竹内さんのウクライナ便り

－カメネツ・ポディルスキーへの旅－

キエフ駐在 竹内高明

8月23日夕刻の夜行でキエフを立ち、27日早朝に戻ってくる往復切符は、1枚57グリヴナ。(約1,300円、1グリヴナ≒23円) …この切符は座席指定、4人で1つのコンパートメント、向かい合わせの座席の上にそれぞれ寝棚がついて下ろせるようになっており、つまり座席と寝棚を合わせて4人が横になれる。扉は中から鍵がかかり、窓は開かず一応エアコンつき。シートと毛布は別料金で、1組6グリヴナというものです。



カメネツ・ポディルスキーの街のたたずまいは、ジトーミル以上に田舎町で予算不足の様子。走っているバスなどみずぼらしく、入ったカフェでも停電中のところがありました。まあ、ひなびていていいと言えはいいのですが。バスで30分ほどのところにあるホトインにも、ドゥニステル河畔の中世の城塞を見に行きましたが、9月にここでクチマ大統領とポーランドの大統領が会見するとかで、城は改装中でした。国民宿舎?のような施設(直訳すれば「観光客ベース」)に素泊まり(1人1泊10グリヴナ)しましたが、3人部屋はベッド3つ・ワードローブ1つ・机1・椅子1・洗面台1がちょうど納まる広さでその他に何もなく、「ここでマルーシュカが寝た」など子どもの落書があり(マリファナの葉っぱの落書もあった)、廊下の端の共同トイレなどソ連時代と何ら変わらない様子でした。

どうして細かくこういうことを書くかという点、ちょうどこの施設にチェルノブイリの汚染地域の子どもたちが保養に来ていたからです。保養と言ってもたいした設備はなさそうで、ホールのうつりの悪いTVを観たり、外で紙飛行機を投げたり、バレーボールをしたり、夜は庭のディスコでおどったりしていました。「22:30就寝」と廊下の日程表には書いてありましたが、その後も、私と同行の青年の表現を借りれば「激しい夜の生活」が営まれており、他の部屋をノックして呼びかけたり廊下を走りまわったりと、修学旅行状態でした。私たちは部屋でビール等を飲み雑談していたのですが、耐えかねた1人(女性)が廊下に出、「あんたら静かにしないと頭をちょんぎるからね、わかったか!」とどなると、うそのように静かになりました。

その友人でキエフの音楽院で声楽を勉強している娘さんに、「私たちは、事故後キエフで被曝するだけの被曝はすでにしてしまった。つまりチェルノブイリはもう過ぎたことという感じを持っているが、被害は今も続いているのか?」という質問をされ、「被災者の健康が悪化しているのは事実である」と答えておきました。ちなみに先月、TVのニュースで、国の予算がないため法に定められている被災児童の保養が100%はできない(実際のパーセンテージはメモせず忘れてしまいましたが、かなり低かった)という報道があり、その際「デネシ」が画面に出ており、「汚染地域の子どもの体内被曝線量を保養の前後で測ると、確かに減少するのだが、国の予算が足りないので、最低必要な21日間の保養ができないケースが多い」というトルスターノフ院長のコメントがありました。



# 新風!! 活躍!! NGOセンターから若き二人派遣

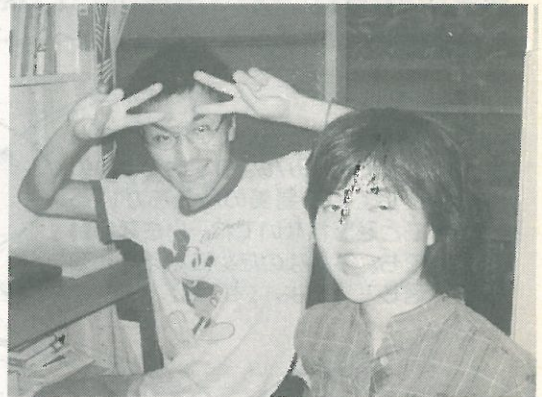
『ポレーシェ』をご愛読の皆さん  
初めまして 古江 美穂 です。  
私が、今回の“NGOスタッフ育成プログラム”に  
応募したのは、なぜだったのか… ひとつだけ思

っていたのは、“現場に生きる”ということが学べるのではないかとは思っていました。“NGO”のイメージとして、現場に行くんだというイメージがあったからです。今実際に、事務局で「チェルノブイリ救援・中部」のいろんなことを教えていただきながら、いろんな仕事をさせていた  
だいてますが、やっぱり現地を見ずに、現地のことを想うのは、私にはちょっと無理があります。なので、今すぐにでもウクライナに行きたいです、本当は。私はどこかの団体をお手伝い  
したこともなければ、ボランティアも全くしたことがありません。そんな私がなぜここにいる  
のか、自分でも不思議なのですが、“研修”という形で「チェルQ」に関われたことは、とても  
ラッキーだったのではないかと考えています。一から教えてもらえるし、何でも挑戦させてくれるし…。  
“型がない”“自由だ”というのは、あまり経験もないし、何かをするにはとても不便ですが、(不安だし  
…) でも、ここにいるのはとても楽しい。

事務局の方々をはじめ、スタッフの皆さんには、  
ご迷惑をお掛けしますが、これからもよろしくお願い致します。

初めまして。長町 諭 と申します。

今回、「なごやNGOセンター」の“スタッフ育成  
プログラム”の一環で、しばらくの間チェルQさん  
で勉強させていただくことになりました。私は以前より、世の中を少しでも良くしようという  
非営利活動の分野でやっていきたいという思いが強かったのですが、諸事情で今までは部分的  
な関わりしか持てませんでした。しかしこのたび状況が整い、これを機会に仕事も辞め、自分  
の生活の中心をこの分野へシフトすることができました。私が一番関心を持っているのは、非  
営利団体：NPO・NGOのサポートをすることです。日常業務に追われ手の届かない部分をフ  
ォローする。団体運営の助言をする。団体間の交流を促進し、知識を共有する。人材を育成す  
る。資金を集める、等々。この分野で活動する人々は、仕事を持ちながらその空いた時間で活  
動していることが多く、サポート団体の役割は非常に大きいと思います。団体運営のサポート  
をしつつ、かつ一般市民の理解を得、非営利活動の底辺を広げていきたい。非営利活動とい  
っても、この分野に携わっている人々はいわゆる「ボランティア」だけではありません。有給で  
働いている人々もいます。何をしても生活していくだけのお金は必要です。ここでいう  
「非営利」とは、お金を必要以上に自分のものにせず、次の活動の資金に充てていく、という  
ことです。この分野の発展のためには、この分野に専従する人が必要だと思えます。私は財団  
や行政を駆け回る、もしくは社会にいいお金の流れをもたらすような自主事業を起こして自分  
の食いぶち&プラスαを生み出したいと思っています。ゆくゆくは、企業を含めすべての団  
体が、自己の利益を優先しすぎることなく、自分たちの生きる社会への還元を重視した活動を目  
指すよう、社会システムの改築、一人一人の意識改革に取り組んでいきたいと思えます。チェ  
ルQさんには研修が終わった後も、なんやかんやでいろいろ関わらせていただくことになるか  
と思えますので、今後ともどうぞよろしくお願い致します。



〈長町さん(左)と古江さん(右)〉



## 事務局便り

今月から、名古屋 NGO センターの紹介で事務局に2人の研修生を迎え、ぐっと平均年齢が若返り、また随分にごやかになりました。昼食時にはそれぞれ持ち寄ったおかずを交換し合うので、なかなか豪華なものです。普段の人間関係が乏しい私などは、年代の違う人間が集まるこの事務所がなんだかとても貴重に思えてしまいます。ただ、おしゃべりが増えた分、何となく過ごしているとあつという間に半日が経つことも…気をつけねば。新しく入ったお二人にはできるだけ多くの経験をしてもらおうと、ミルクキャンペーン・カード事業・招聘事業・そのほかのイベントにも中心メンバーとして企画実行に携わってもらうことになったほか、事務局の一般的な事務ワークも一通り体験してもらっています。メニューが多すぎて消化不良を起こさないかちょっと心配なのですが、何かが一つでも「身に残るもの」があればと思います。とは言え、私も NPO の実務に携わってまだ1年、やってない事の方が多い手前、あまり偉そうなことは言えないのですが…。

話は変わりますが、おねだりをひとつ。山盛さんの机の FAX 電話、それほど年代物というわけではないのですが、運営委員とのやり取りに酷使しているせいか、すぐに紙は巻き込むし送信は途中で切れるし、FAX の配信が1日で終わらないことも。もし、どなたか買い替えて1台余っている FAX 電話がありましたら、譲っていただけないでしょうか？ (佐保)

毎日、お祈りしているね。がんばってね。みんなのことをおのりしている星美の私たちがいることを忘れないでね。小さなお金でも、みんなのためになることを信じているよ。〈10歳〉

私は、ハッピーランチデーがこんなに人をたすけていると思いませんでした。だからこんどは、もっと心のかもったけん金をして、もっと多くの人をたすけたいと思いました。そしてもっと多くの人を喜ばせたいと思います。〈11歳〉

原発事故で親を無くし、病気にかかってさびしい、つらいなど思っているかもしれませんが、そういうことばかり思っていてはつらくなるだけです。

もっと前向きに明るく笑ってください。きっと明るくなります。がんばってください。このままけん金を続けます。〈12歳〉

## 1グリヴナ キャンペーンへ (星美学園より)

## 編集後記

☆いやあ～、私苦しいのに皆さんのパソコン技術にまったくついていけず、足引っ張ってばかりいました。ワがこうなってああなってピヤァー！って(笑)。(上記参照) 来号はガンバリマス！！ (長)

☆初めての編集作業は…お腹が空きました。秋ですね。今一番食べたい秋の味覚は“栗”です。どこかの山にイタダキに行こう！！ (古)

☆在ウ日本大使館で「ウクライナ国内で金銭の取得をすると税金がかかる」と聞いた。つまり現地で外務省交付金を受けると税金がかかるんですよねえという。政府間の問題は政府間で解決してよ！ (美)

☆先日、買ったコンビニおにぎりの包装フィルムに1センチほどの裂け目があった。食べるかどうか悩んだ末、食べてしまった。勇気ある決断の難しさを身をもって感じた。 (佳)

印刷「エープリント」  
〒456-0022  
名古屋市熱田区波寄町20-14  
TEL・FAX (052) 871-9473

9・11同時テロ

2アルカイダ  
初めて明かす

当初の標的は原発

原発を愛するすべての皆様へ (J)